

子どもたちの尿検査から見えてきた放射能汚染の実態
フランス放射能測定NGO “ACRO”
理事長D.Boilley氏を迎えて

2012年8月18日

主催：福島老朽原発を考える会（フクロウの会）

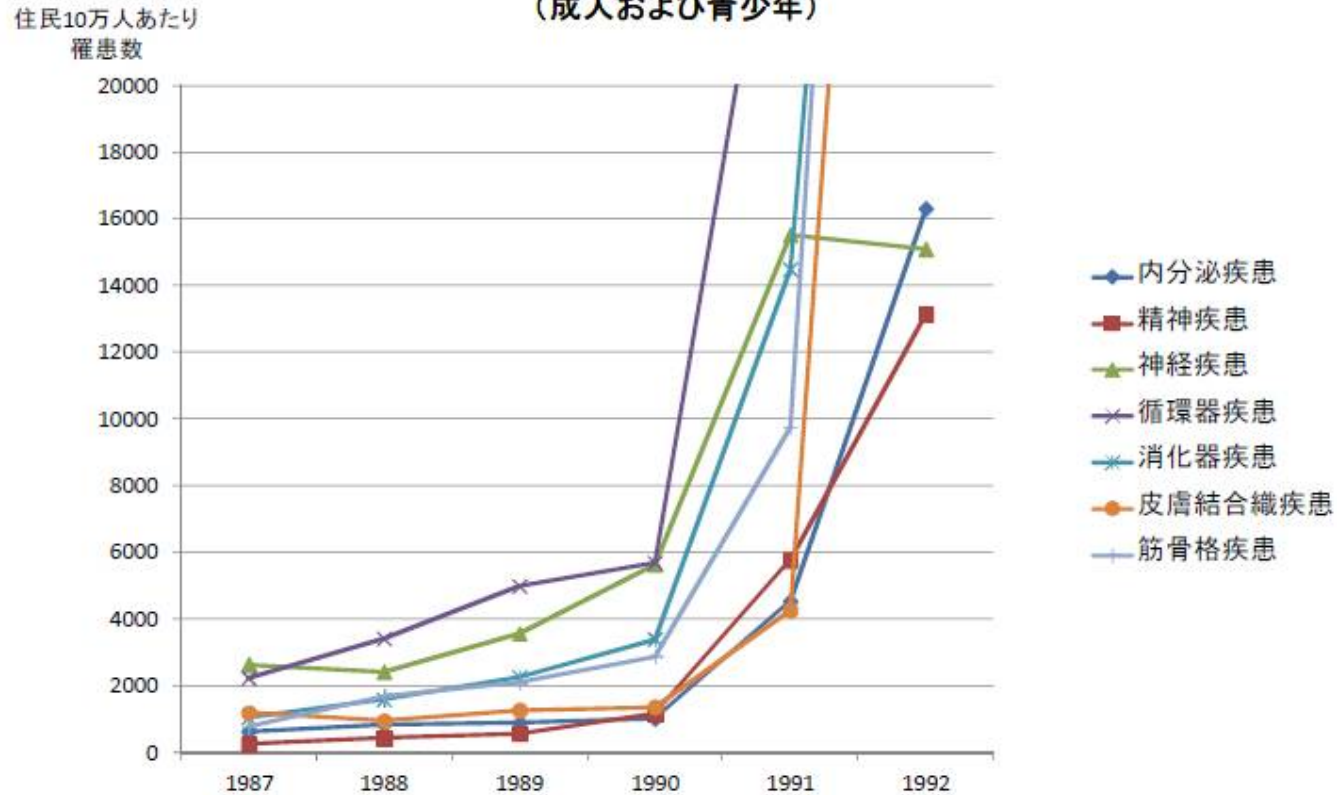
協力：国際環境NGO FoE Japan

チェルノブイリ膀胱炎（ぼうこうえん）

- ・福島第一原発で放出させた放射性物質は
→ セシウム134、137では広島型原爆168個分
- ・セシウム137は、人類のはじめた核実験以前には地球上に存在しなかった。
- ・福島の子どもたちの尿からセシウム137が出ている。
- ・長期の被曝が前がん状態をつくる。
- ・チェルノブイリでは、膀胱がんが100万人あたり26人（1986年）が43人（2001年）に倍増した。
一児玉龍彦教授（東京大学先端技術研究センター
生物医学ラボラトリー 兼：東京大学アイソトープ総合センター長）

放射線被ばくによる健康影響

チェルノブイリ原発事故で被ばくした北ウクライナ住民にあらわれた疾患 (成人および青少年)



「チェルノブイリ原発事故がもたらしたこれだけの人体被害」核戦争防止国際医師会議ドイツ支部 表7-1をグラフ化。
原典: Nyagu, A. I. Medical consequence of the Chernobyl accident in Ukraine. 1994

チェルノブイリ事故でのセシウムの人体影響

チェルノブイリ膀胱炎を発見した日本バイオアッセイセンター長福島教授の研究

- チェルノブイリ事故の後、ウクライナで膀胱炎が増加した。⇒前立腺肥大症の手術で切除された膀胱の組織の分析。
- 膀胱の上皮の細胞が不ぞろいな形に変化(上皮異形成)している例が多いこと、更に膀胱がんの前段階である「上皮内がん」が多く出ていることを発見。
- 福島氏は「膀胱がん化する恐れが高い慢性の増殖性膀胱炎」と結論付け、2004年に「チェルノブイリ膀胱炎」と命名した。

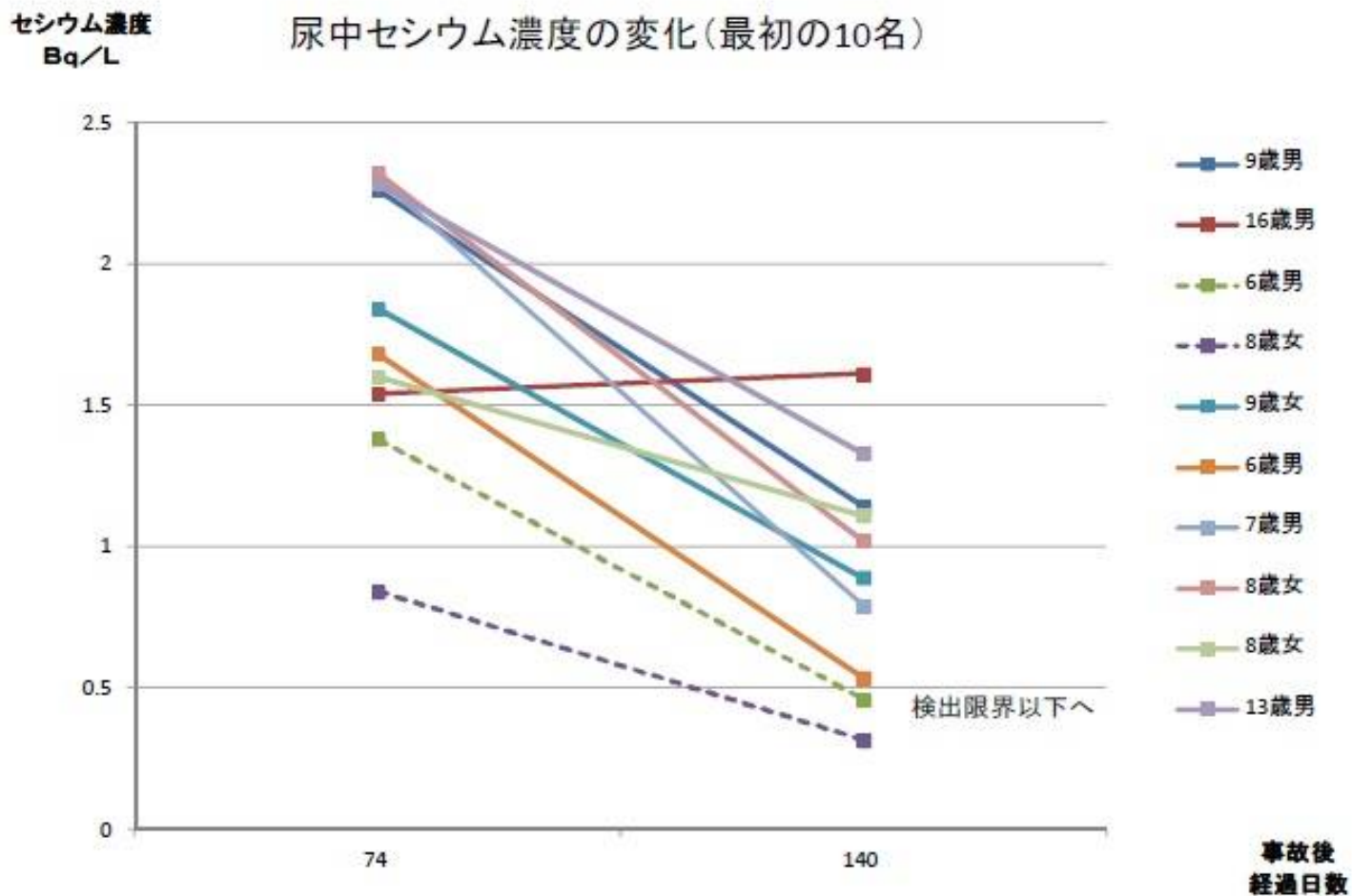


分類	セシウムによる 土壌汚染 [Bq/m ²] (セシウム 137)	対象数	前立腺肥大で 切除した膀胱組織		尿中の セシウム濃度 [Bq/L] (平均)
			上皮異 形成	上皮内 がん	
高放射線地域	111万~18.5万	73人	71人 (97%)	47人 (64%)	6.47
中間的な 放射線地域	18.5万~1.85万	58人	48人 (83%)	34人 (59%)	1.23
非汚染地域	1.85万以下	33人	9人 (27%)	0人 (0%)	0.29

私たちが測定したセシウム濃度はこのレベルに相当

予防と継続検査で内部被ばくの防止が図られる

(1) 事故直後に測定した福島市内の10名の継続調査の例。



福島老朽原発を考える会 青木一政氏 作成

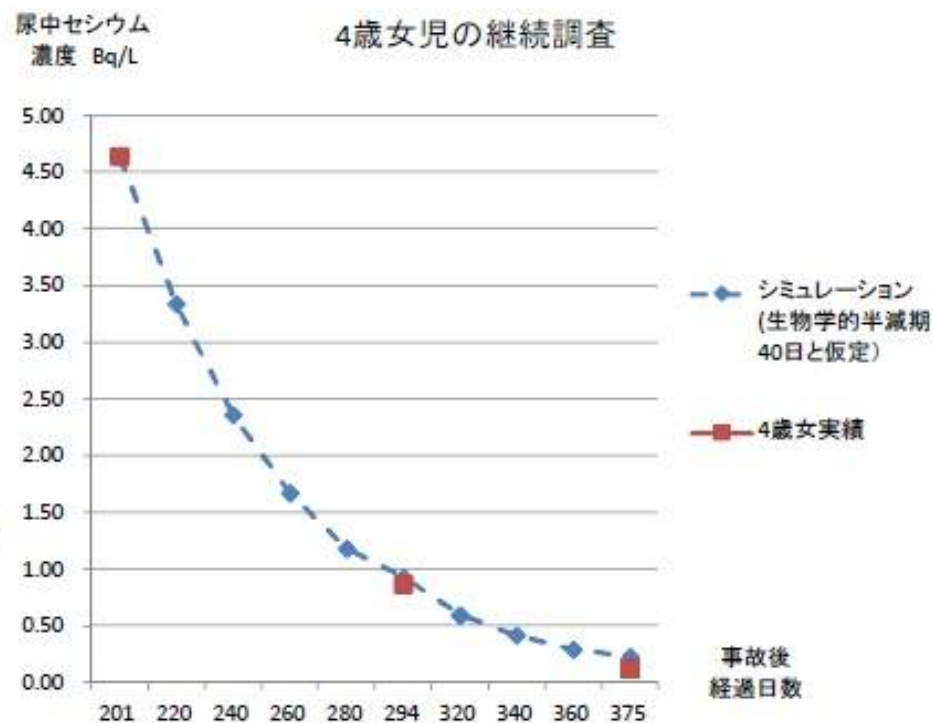
予防と継続検査で内部被ばくの防止が図られる

(2) 4歳女子の例

- 岩手県一関市在住の4歳女児:4.64Bq/Lを検出(2011年9月)。
- 2011年7月頃までは放射能の事は全く気にせず、祖母の畑でとれた野菜、椎茸、山菜などを食べていた。家で栽培した干しシイタケの測定したところ1,810Bq/Kgを検出(フクロウの会/ACRO測定)。



- 数値が明らかになって以降、野菜は西日本産、北海道産などに切り替え。
- おそらく大変な努力が必要だったことでしょう。3カ月後、12月に継続検査を行った結果、顕著に改善。



予防と継続検査で内部被ばくの防止が図られる

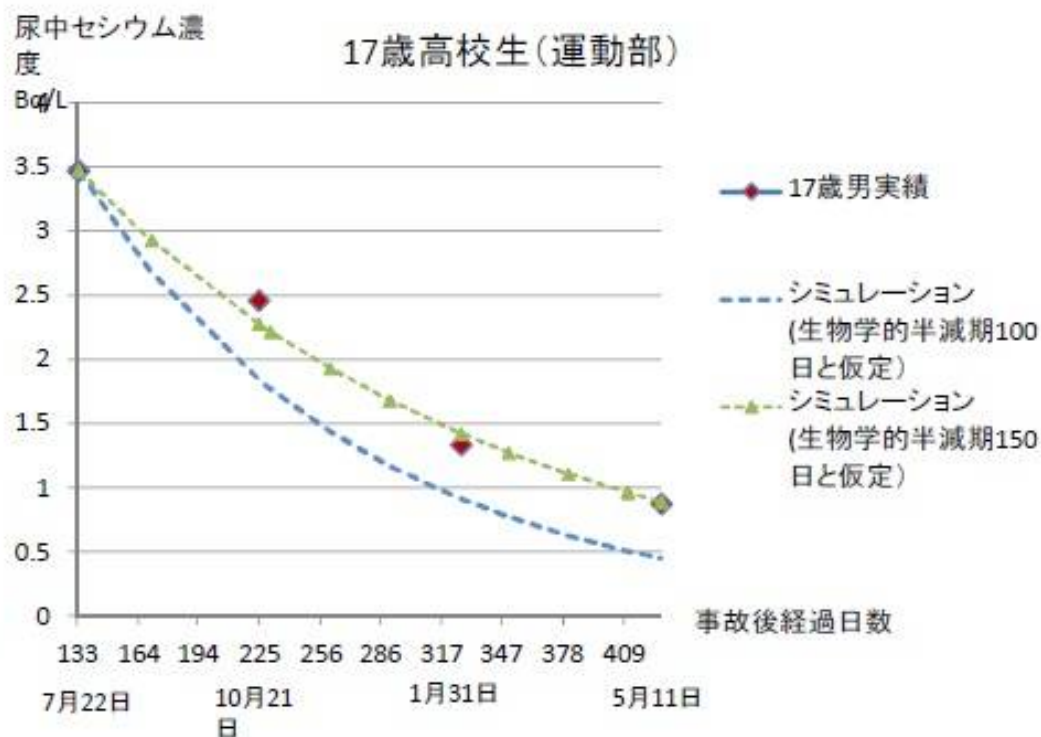
(3) 17歳男子(運動部員)の例

●福島市在住の高校生;放課後毎日2時間以上練習、土日も練習か試合。7月末の検査で3.47Bq/Lと高い値。

●検査前までは食材は特に産地を気にせず。運動部員のため、練習で身体やジャージが土ぼこりで汚れるが、帰宅後すぐに食事を取り、その後風呂へ入る生活。



- 検査後は食材の産地を選んで買う。検査後は調理用も含めてミネラルウォーターを使う。
- 帰宅して先ず風呂に入ってから食事をするように変更。
- 減少率が少ないことが判明 ⇒ 更なる調査継続



予防と継続検査で内部被ばくの防止が図られる

(4) 23歳男性の例

2回目の検査で10%程度下がったが減少率は少ない。
3回目で検出限界以下へ顕著に改善。
2回目と3回目の間での大きな変化は？



- 1-2月(冬場)は積雪のためソフトボールの練習を中止。
- 3-4月は花粉症対策でマスクをしていた。

